

PRAEVIDENTIA DAILY (12月3日)

昨日までの世界：円安・ドル高・ポンド高

昨日は、欧米時間の米長期債利回り上昇と共にドルが対主要通貨で対 NZ ドルを除いて堅調だったのが特徴的だった。ドル/円は特段の追加材料がない中で欧州時間に米長期債利回り上昇と共に上昇し一時 103 円乗せ、更に米 ISM 製造業景況指数が 57.3 と前月 (56.4) および市場予想 (55.1) を上回ったこともあって、一時 103.13 円へ続伸した。

ポンドは、これまでの上昇基調を引き継ぎ、また東京時間朝方発表のホームトラック住宅価格指数が前年比 +3.8%と前月 (+3.1%) から上昇が加速したこともあって続伸、対ドルで 1.6443 ドルへ上昇し直近高値を更新した。その後、対ドルでは全般的なドル高傾向を受けて反落に向かい NY 時間引けにかけてほぼ先週金曜の終値近辺まで値を戻したが、対ユーロでは続伸しユーロ/ポンド相場は一時 0.8257 ポンドと今年 1 月以来のユーロ安ポンド高水準となった。更に、英製造業 PMI が 58.4 と前月 (56.5) および市場予想 (56.1) を大きく上回ったこともあって、対円でも続伸し、一時 168.80 円へ上昇した。

この間、豪ドルは週末発表の中国 11 月製造業 PMI の予想比上振れ (51.4、前月比横ばい)、豪 10 月住宅建設許可件数 (市場予想-5.0%、実績-1.8%)、豪 3Q 企業利益 (市場予想+1.0%、実績+3.9%)、更に中国 11 月 HSBC 製造業 PMI 改定値も予想比上振れるなど (市場予想 50.5、実績 50.8)、良好な材料が相次いだことから、対米ドルで先週金曜の安値 (0.9056 ドル) から一時 0.9168 ドルへ若干持ち直した。NZ ドルも、早朝発表の NZ 交易条件指数の大幅上振れ (前期比+7.5%) に加えて、豪ドルに連れ高となったこともあって、対米ドルで最近の下落基調から持ち直している。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化

	変化率	米日2年金利差	米2年金利	日2年金利	米日10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	+0.5	+0.01	+0.00	-0.00	+0.04	+0.05	+0.01	-0.3	-0.0	+1.2	+1.6
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西伊の対独格差
ユーロ/ドル	-0.4	+0.01	+0.01	+0.00	+0.00	+0.05	+0.05	-0.3	-0.3	+1.6	-0.02
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	-0.1	+0.03	+0.03	+0.00	+0.03	+0.08	+0.05	-0.8	-0.3		
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
豪ドル/米ドル	-0.0	+0.05	+0.05	+0.00	+0.01	+0.06	+0.05	-0.3	-0.6	-0.0	
	変化率	NZ-米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ-米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
NZドル/米ドル	+0.8	+0.01	+0.01	+0.00	-0.07	-0.02	+0.05	-0.3	-0.6	-0.0	
	変化率	米加2年金利差	米2年金利	加2年金利	米加10年金利差	米10年金利	加10年金利	米株価	原油WTI	CRB	
米ドル/加ドル	+0.3	-0.01	+0.00	+0.01	-0.00	+0.05	+0.05	-0.3	+1.2	-0.0	

(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅 (%ポイント)。

きょうの高慢な偏見：豪ドル安には米国の力が必要に

本日の相場材料としては、①豪 10 月小売売上高 (9 : 30、前月+0.8%、市場予想+0.4 : %、前月比)、②豪 3Q 経常収支 (9 : 30、前期-94 億豪ドル、市場予想-115 億豪ドル)、③中国 11 月非製造業 PMI (10 : 00、前月 56.3、市場予想なし)、④豪 RBA 金融政策決定 (12 : 30、市場予想は政策金利 2.50%で据え置き)、⑤英 11 月 PMI 建設業 (18 : 30、前月 59.4、市場予想 59.0)、などが予定されている。

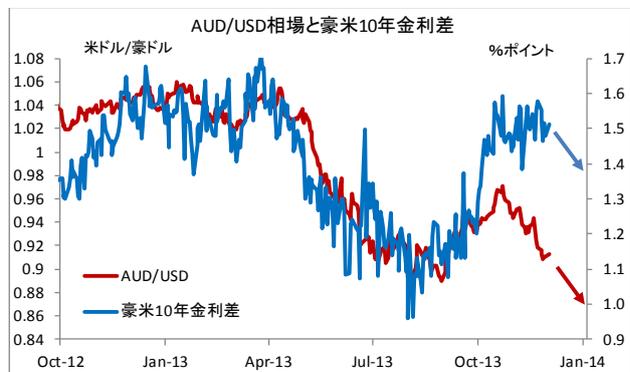
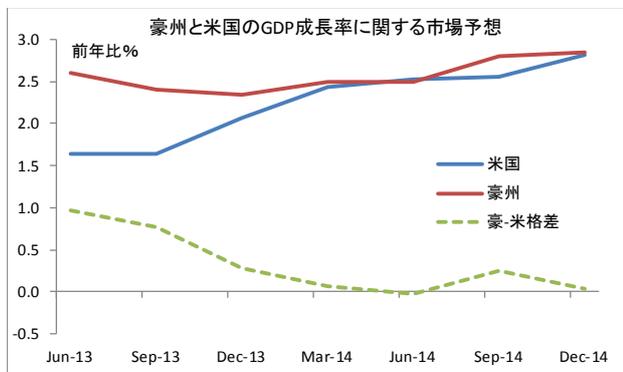
ドル/円は 11 月入り後のほぼ一方向の上昇トレンドが続いており、本日は材料がない中で 103.50 円方向への続伸の可能性が高いだろう。こうした動きは後半の ADP、GDP、NFP などが市場予想を下振れした際の調整が大きくなるリスクを高めているかもしれないが、目先はトレンドフォローが続こう。

豪州では RBA 理事会が開催され、政策金利は 2.50%で据え置きとみる向きが殆どだが、RBA は石炭、鉄鉱石、LNG などの鉱業セクターから非鉱業セクター主導の経済への移行を支援するため、声明文で豪ドル安誘導を繰

り返す可能性が高く、発表後に一旦豪ドル売り圧力が高まるかもしれない。声明文ではこれまで、「豪ドルは前半の水準を下回っているが、依然として不快なほど高い。均衡のとれた成長を達成するには豪ドルの更なる下落が必要だろう (The Australian Dollar, while below its level earlier in the year, is still uncomfortably high. A lower level of the exchange rate is likely to be needed to achieve balanced growth in the economy)」と表現されており、今回も繰り返される可能性が高いだろう。

但し、10月23日の高値である0.9753ドルから先週末の直近安値となる0.9056ドルまで7%下落しており、口先介入の追加的な豪ドル押下げ効果は薄れてきている可能性があるほか、ここ数日発表されている豪州経済統計は11月28日の3Q民間設備投資、昨日の住宅建設許可件数や企業利益など、市場予想を上回るものが続いており、中国でも製造業PMIの予想比上振れなど、豪ドル下支え材料が相次いでおり続落が一旦止まったかたちとなっている。

こうした中、豪ドル/米ドル相場が更に下落するには、豪州要因よりも米国の強気要因が必要となっているとみられる。この点、4日の豪州3QGDP(市場予想は前期比+0.7%)と5日発表の米3QGDP(市場予想は前期比換算で+0.7%)で米成長率の豪州へのキャッチアップ加速が示され(下図を参照)、また米雇用統計で量的緩和縮小期待が高まり、豪米金利差が豪ドルに不利な方向へ縮小すれば(下図を参照)、豪ドル/米ドル相場が年内に0.90ドル割れに向かう後押し材料となる可能性が高いだろう。米3QGDPや非農業部門雇用者数は現在の市場予想程度に留まっても良好な内容と言える。



ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、全てお客様ご自身でご判断下さいませようよろしくお願い申し上げます。
 当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。
 当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。

プレビデンティア・ストラテジー株式会社
 金融商品取引業者(投資助言・代理業)関東財務局長(金商)第2733号
 一般社団法人 日本投資顧問業協会 会員番号 012-02641